

在日コリアン帰国事業の個人史

——家族3名が語る記憶——

太田尾悠吏

本研究は、1959年から1984年にかけて実施された在日朝鮮人帰国事業について、当事者の証言を通じてこの歴史的出来事が個人の人生に与えた影響を明らかにすることを目的とする。従来の研究では、実際に北朝鮮に渡った人々の証言や政策分析が中心であったが、日本に残った人々、特に運動を支援した若者や教育現場にいた教師の経験は十分に記録されていない。筆者自身が在日コリアンの血を引くという背景から、家族へのインタビューを通じて、帰国事業への動員の実態、在日コリアンのアイデンティティの葛藤、責任の問題を追究した。

調査対象者は筆者の祖母(A氏)、祖母の弟(B氏)、祖母の妹(C氏)の三名で、いずれも仙台で育った在日朝鮮人二世である。A氏は日本の学校に通い総連系の高校生会に参加、B氏は朝鮮学校に通学、C氏は朝鮮学校の教師を務めるなど、それぞれ異なる立場から帰国事業を経験している。半構造化インタビューを実施し、対象者の自由な語りを引き出すことに重点を置いた。

調査の結果、動員と抵抗の多様性が明らかになった。A氏は「言われるがまま」に署名活動やデモに参加したが、深い感情的コミットメントは持たず、大学卒業後には運動から距離を置いた。B氏は朝鮮学校で「クラスごとの帰国ノルマ」という組織的動員を目撃し、貧困層や総連幹部の子弟が「人質」として送られた実態を証言した。C氏は教師として生徒を帰国させないよう同僚と抵抗したが、結果的に担当生徒を送り出すこととなり、現在もトラウマを抱えている。

「地上の楽園」という幻想については、北朝鮮は理想郷として宣伝されたが、B氏の訪朝経験では、港での歓迎が演技であることや、通貨が信用されず外貨が要求される実態を目撃した。A氏は帰国者から薬や金銭の要求が続いたことを語り、宣伝と現実の乖離を示した。

アイデンティティの葛藤に関しては、日本の学校に通ったA氏、朝鮮学校で民族教育を受けたB氏、朝鮮学校教師として民族教育に従事したC氏は、それぞれ異なる形で在日コリアンとしてのアイデンティティと向き合った。三者に共通するのは、単一で固定的なアイデンティティではなく、状況に応じて変化し内部に矛盾を抱えたアイデンティティであった。

記憶と語りには明確な温度差が見られた。A氏は帰国事業を「いい経験」として淡々と語り、語ることで記憶が整理されたと述べた。B氏は長年帰国事業について語りたがらなかったが、インタビューでは堰を切ったように語り、総連の組織的欺瞞を厳しく批判した。C氏は生徒を守れなかった後悔を「トラウマ」と表現し、最も感情的な語りを示した。

同じ家族でありながら、立場の違いが、帰国事業の受け止め方に大きな差を生んだ。三者

の証言は、帰国事業が一様な経験として記憶されておらず、個々人の人生の文脈の中で異なる意味を持つことを示している。帰国事業を経験した世代が高齢化する中、日本に残った側の多様な記憶を記録することは、この歴史的出来事の全体像を理解する上で重要な意義を持つ。